【論　　文】

語源でみる接頭辞の語彙化*

姫　田　慎　也

1. はじめに

英語の接辞（affix）の中には[1]，語として使用される例が存在する。例えば，接頭辞hyper-は形容詞hyperとしても用いられる。形容詞hyperが語として確立する過程として，まず，基体（base）であるactiveに接頭辞hyper-が付与して派生語（derivative）であるhyperactiveが生まれる。その後，hyperactiveからactiveを取り除き，語形短縮（clipping）したものが形容詞hyperである[2]。

接辞が語として用いられる例の全てが語形短縮によるものというわけではなく，例えば，名詞等で用いられるantiは，接頭辞anti-そのものが転換（conversion）し[3]，語彙化（lexicalization）したものである[4]。接頭辞の語彙化のパタンとして，姫田（2022）において，接頭辞が付与した派生語から語形短縮するパタン，接頭辞そのものが転換するパタン，語形短縮と接辞の転換の両方がみられるパタンの3つが確認されている。

2.節では，ギリシャ語系とラテン語系のグループに分け，接頭辞が付与した派生語からの語形短縮による語彙化について，3.節では各グループの転換による語彙化について，4.節では各グループの語形短縮と転換の両方による語彙化について考察する。5.節ではアングロ・サクソン語系接頭辞の転換による語彙化について，初出年からその特徴を考察する。

語に付与する小さな単位として，接辞とよく似たものに連結辞がある。

* 本稿の執筆に際して大変貴重なご指摘・ご助言をいただいた査読委員のお二人の先生方に感謝申し上げる。なお，本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任による。

『日本英語英文学』第33号（2023）47-71
©2023 日本英語英文学会

接辞と連結辞の区別は困難であり，辞書によって記載が異なる。6.節では辞書が接頭辞及び連結辞と想定される項目についてどのように扱っているのか，アングロ・サクソン語系，ギリシャ語系，ラテン語系の3つの語源グループに分け，その特徴を調査する。

なお，辞書として，本稿では*Oxford English Dictionary Online* [OED], *Oxford Dictionary of English* [ODE], *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current Englis*h [OALD], *Longman Dictionary of Contemporary English* [LDCE], *Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary* [CCALD], *Random House Unabridged Dictionary* [RHUD], *Webster's New World Dictionary of American English* [WEB]を参照する。

2. 接辞の語彙化のパタン

2.1. 派生語からの語形短縮（ギリシャ語系）

ギリシャ語系接頭辞付与による派生語が語形短縮した例についてみていく[5]。本稿では語としても使用される16種類のギリシャ語系接頭辞の語彙化を扱うが，そのうち10項目が語形短縮と考えられる。

2.1.1. aero

ODEではaeroは形容詞aeronautical及びaerodynamicの短縮語として記載されているが，OEDでは形容詞aerodynamicのみの記載である。（1）のaeroはaerodynamic（空力学的な）からの語形短縮である。なお，例文中の下線は全て筆者によるものである。

（1） We softened the lines for a more <u>aero</u> look.

（ODE, *aero*=aerodynamic, adj.）

2.1.2. auto

OEDではautoの基体として，名詞ではautobiography, automobile, automatic weapon等，形容詞ではautomaticが記載されている。また，動詞autoは名詞autoの転換である。ODEではautoはautomobile及びautomaticの語形短縮である。（2）のautoは名詞automobileの語形短縮である。

（2） ‘Cars of Tomorrow’ will showcase alternative fuels and high mileage autos.
（OED, *auto*=automobile, n.[5]）

2.1.3. homo

ODEでは名詞及び形容詞homoはa homosexual man及びhomosexualの語形短縮である。OEDでは‘Also occasionally: a homosexual woman, a lesbian.’と記載がある。（3）のhomoは形容詞homosexualの語形短縮である。

（3） Look at homo guys; they get off on receiving as well as giving, you know.
（OED, *homo*=homosexual, adj.）

なお,「ヒト属，人間」という意味における名詞Homoはラテン語源である。

2.1.4. hydro

ODEではhydroの基体として，hydropathic treatment, hydroelectric power-plant, hydroelectricityが記載されており，形容詞としてhydropathic（温泉治療の）, hydroponicの記載がある。（4）のhydroは形容詞hydroponic（水栽培の）の語形短縮である。

（4） Arjan, the owner of a popular coffee shop, pointed out that hydro yields were far greater. （OED, *hydro*=hydroponic, adj.）

2.1.5. hyper

ODEではhyperは形容詞hyperactiveの語形短縮であり，名詞hypercritic（酷評家）の語形短縮としても記載されている。（5）のhyperは形容詞hyper-active（極度に活発な）の語形短縮である。

（5） Eating sugar makes you hyper. （ODE, *hyper*=hyperactive, adj.）

2.1.6. mono

ODEでは名詞monoの基体としてmonophonic recording, monochrome picture, mononucleosis（単球増加症）, monofilament（単繊維）が記載されて

おり，OEDではそれ以外の基体として，monohull（単胴船）が記載されている。形容詞としてのmonoはODE及びOEDではmonophonic, monochromeからの短縮語である。(6) のmonoは形容詞monophonic（モノラルの）の語形短縮である。

(6) Some stereo power amps can be converted into more powerful mono amplifiers. (OED, *mono*=monophonic, adj.[3])

2.1.7. phono

ODE及びOEDではphonoはphonographの語形短縮と記載されている。また，OEDではphonoの2つ目の意味として，オーディオ機器等における「同軸コネクター」と記載されている。(7) のphonoは名詞phonograph（蓄音機）の語形短縮である。

(7) Needlz has thousands of phono needles, styli, cartridges, belts, parts for most record players. (OED, *phono*=phonograph, n.)

なお，同じギリシャ語*phōnē*を語源とするphoneは，接頭辞tele-と接尾辞-phoneが組み合わさったtelephoneの語形短縮である。

2.1.8. photo

ODEではphotoは名詞photographの語形短縮と記載されており，OEDではさらにphoto finish（写真判定を必要とするゴールイン）の意味で記載されている。また，OEDではphotographに接尾辞-icが付与した派生形容詞photographicの語形短縮としても記載されている。(8) のphotoは名詞photographの語形短縮である。

(8) I'll take a photo of you. (OALD, *photo*=photograph, n.)

(9) のように形容詞photoedが存在する。

(9) Albums of past journeys and photoed friendships. (OED, *photoed*, adj.)

2.1.9. poly

ODEではpolyはpolyester, polytechnic（工芸学校（の）), polythene（ポリエチレン）の語形短縮である。OEDではさらにpolygon（多角形), polyamory（ポリアモリー), polyamorist等の記載がある。（10）のpolyは名詞polyesterの語形短縮である。

（10）I use a black poly fiber（poly fiber is a synthetic fiber）... This stuff is often sold for use as costume beards.　（OED, *poly*=polyester, n.[4]）

2.1.10. tele

OEDでは（11）のteleは名詞televisionの意味で記載されている。

（11）I go to the TV room, switch on the Tele, and throw myself on the couch.
（OED, *tele*=television, n.[3]）

2.1.7.でtelephoneの短縮語phoneについて触れたが，OEDでは短縮語teleの基体としてtelephoto（望遠レンズ）の記載がある。語形短縮において，telephoneではtele-が，telephotoではphotoが省略されている。OED等において，-phoneは接尾辞もしくは連結辞と記載されるが，photoは自立語（lexical form）である[6]。接頭辞もしくは連結辞tele-が省略されず，自立語photoの方が省略されているのである。

また，OEDでは，接頭辞（OEDでは連結辞）tele-からの借用語の名詞teleを記載しているが，意味的には「テレパシー」であるので，（12）のteleは名詞telepathy等の語形短縮であると考えられる。

（12）The psychodrama is made up of the relationships of *tele* between all the participants.　（OED, *tele*=telepathy?, n.[2]）

2.2. 派生語からの語形短縮（ラテン語系）

本稿では語としても使用される16種類のラテン語系接頭辞の語彙化を扱うが，そのうち7項目が語形短縮と考えられる。

2.2.1. bi

OEDでは，biは語形短縮の基体としてbisexualのみの記載である。形容詞または名詞として使用される。（13）は形容詞biの使用例である。

（13）Her parents never knew she was bi – still don't.
（OED, *bi*=bisexual, adj.）

2.2.2. dis

ODEでは，disは動詞及び名詞disrespectの語形短縮である。LDCEではdisをdissと綴る。disの基体はdisrespectのみでなく，WEBでは，discount及びdistance，RHUDでは，disparage（～をけなす），OEDではdiscount, disconnected, distributeが記載されている。（14）のdissは動詞disrespect（～を軽蔑する）の語形短縮である。

（14）You're sitting in the local caff when you hear some girls dissing your mate. Do you tell her?
（OED, *diss*=disrespect, v.[2]）

2.2.3. extra

ODE及びOEDでは，extraは形容詞extraordinaryの語形短縮である。

（15）A lot of extra work is involved.
（ODE, *extra*=extraordinary, adj.）

また，extraの基体となる派生語extraordinaryの品詞は名詞と形容詞であるが，（16）のextraは副詞として使用されているため，（16）のextraは副詞extraordinarilyの語形短縮である。

（16）You're going to have to work extra hard to pass the exam.
（LDCE, *extra*=extraordinarily, adv.）

2.2.4. semi

ODE及びOEDでは，semiをsemi-detached house, semi-final, semi-trailerの語形短縮としている。（17）のsemiは名詞semi-finalの語形短縮である。

（17）They defeated them in the semi.　　（ODE, *semi*=semi-final, n.）

2.2.5. uni: university

ODE及びOEDでは，uniをuniversityの語形短縮としている。接頭辞uni-付与による派生語は複数存在するが，ODE及びOEDに記載されている短縮語uniの基体としては名詞universityのみである。

（18）Where were you at uni?　　（OALD, *uni*=university, n.）

2.2.6. sub

ODE及びOEDでは，動詞subはsubstitute（交代させる），sub-editの短縮語である。（19）のsubは動詞subedit（整理編集する）の語形短縮である。

（19）His copy was mercilessly subbed and rewritten.（ODE, *sub*=sub-edit, v.）

OEDでは「（給料・賃金の）前借り・前貸しをする」という意味の動詞subが記載されているが，名詞subsist（前借り）の語形短縮の名詞subが動詞subに転換したものであると考えられる。

（20）She was subbing her wages from me a week in advance.（OED, *sub*, v.[3]）

名詞subの基体として，ODE及びOEDではsubmarine, subscription, substitute, subeditor, subsist, subject等をあげており，複数の派生語からの語形短縮がみられる。（21）におけるsubは名詞substitute（代理）の短縮語である。

（21）He came on as sub.　　（OALD, *sub*=substitute, n.）

2.2.7. vice

ODEでは，viceをvice-president, vice admiral等からの語形短縮としている。名詞viceは接頭辞vice-付与による派生語からの語形短縮でもあるが，基体である派生語が文脈によっては複数存在し得る。（22）のviceは名詞

vice-presidentの語形短縮である。

（22） The president of the mess rose..and brought down his silver mallet. ‘Mr. Vice, the Queen,’ that officer said, addressing the vice-president at the opposite end of the table. （OED, *vice*=vice-president, n.[7]）

OEDでは，viceを接頭辞vice-の独立用法ともあるため，語形短縮か転換かをさらに考察する必要がある。

なお，viceには，ラテン語*vitium*が語源の「悪，不道徳，売春」等の意味をもつ名詞があるが，接頭辞vice-とは語源が異なる。

2.3. まとめ

語形短縮した語の基体である派生語が単一であるパタン（例: phono= phonograph）と複数あるパタン（例: auto= automobile, automatic, autobiography）が存在する。基体である派生語が複数存在する場合，基体の特定はコンテクスト内で判断する必要があるといえる。

3. 接辞の転換

3.1. 転換（ギリシャ語系）

ギリシャ語系接頭辞が語に転換した例についてみていく。語としても使用される16種類のギリシャ語系接頭辞の語彙化のうち，5項目が転換によるものである。

3.1.1. anti

「反，非，対，不」の意味をもつ接頭辞anti-の転換として，OEDでは前置詞，形容詞，名詞のantiが記載されている。接頭辞anti-は語だけでなくantinomy（矛盾，逆説）のように接尾辞-nomyと合わさる例も存在する。（23）は形容詞anti（反対の）の使用例である。

（23） You’re so anti that even your career choice is all about ripping relationships to pieces. （OED, *anti*, adj.）

3.1.2. arch

「第一の，主要な」という意味をもつ接頭辞arch-の転換としてODE及びOEDでは形容詞archが記載されている。形容詞archには「第一の，主要な」という意味以外に「おちゃめな，ふざけた」や「抜け目のない」といった意味でも用いられる。

また，副詞としてarchly（ひょうきんに），名詞としてarchness（茶目っ気）が存在する。副詞archly及び名詞archnessには接頭辞arch-の本来の意味を含んでいないため，接頭辞arch-と接尾辞-ly及び接尾辞-nessが組み合わさったのではなく，接頭辞arch-の転換による形容詞archが特有の意味を持つようになり，そこに接尾辞-ly及び-nessが付与したものであると考えられる。（24）のarchは「おちゃめな，ふざけた」の意味の形容詞である。

（24）Some <u>arch</u> boys gave him such a mouthful of dirt.　（OED, *arch*, adj.）

「支配者，王，君主」及び「～に原点をもつ」の意味で，ギリシャ語系接尾辞-archが存在するが，これらの転換による語彙化は起きていない。

なお，建築物等の「アーチ」の意味で用いられるarchはラテン語源である。

3.1.3. mega

「大きい，ものすごい」という意味をもつ接頭辞mega-の転換としてOEDでは副詞と形容詞のmegaが記載されている。なお副詞megaには接尾辞-lyが付与されていない（*megaly）。副詞megaは接頭辞mega-がもつ意味をそのまま受け継いでいるため，形を変えずに転換したものであると想定される。（25）のmegaは「ものすごく」という意味の副詞である。

（25）Club Corner is still a good vantage point but it’s now <u>mega</u> slow, while Becketts is the most spectacular section of the track.（OED, *mega*, adv.）

3.1.4. pseudo

「偽りの，疑似の」という意味をもつ接頭辞pseudo-の転換としてODE及びOEDでは名詞と形容詞のpseudoが記載されている。接頭辞pseudo-と「名前」という意味のギリシャ語系形態素nymとの派生語名詞pseudonym

（ペンネーム）もあり，接頭辞pseudo-は語よりも小さな単位に付与できる。（26）のpseudoは「にせ者，いかさま師」という意味で名詞として使用されている。

（26）When the pseudos meet the greedies and the philistines are in power, cultural desolation is the result. （OED, *pseudo*, n.）

3.1.5. techno

OEDでは名詞及び形容詞のtechno（テクノ音楽；テクノ音楽の）は「技術，工芸，工学」等の意味をもつ接頭辞（OEDでは連結辞）techno-の転換とあり，ODEではtechnoはtechnologicalからの語形短縮と記載されている。ただし，基体のtechnologicalには「テクノ音楽の」という意味がないため，technoとは同義語ではない。（27）のtechnoは「テクノ音楽」という意味の名詞として使用されている。

（27）They drove the crowd wild with a storming half-hour of brilliant techno. （OED, *techno*, n.）

3.2. 転換（ラテン語系）

語としても使用される16種類のラテン語系接頭辞の語彙化のうち，5項目が転換によるものである。

3.2.1. contra

ODE及びOEDは接頭辞contra-の転換として前置詞，副詞，名詞の記載がある。さらに名詞contraはcontrarevolucionario（反政府軍兵士という意味のスペイン語）の語形短縮として記載されているが，英語ではない。（28）の名詞contraの例である。

（28）He weighs carefully the pros and the contras. （OED, *contra*, prep.）

3.2.2. counter

ODE及びOEDではcounterは動詞，副詞，形容詞，名詞の複数の品詞が

記載されている。「反対，仕返し，対応」等の意味をもつ接頭辞counter-と同様，counterは‘against’の意味のラテン語*contra*が語源である。（29a）は動詞として（29b）は副詞としてのcounterの使用例である。

（29）a. The second argument is more difficult to counter.（ODE, *counter*, v.）
b. His writing ran counter to the dominant trends of the decade.
（ODE, *counter*, adv.）

3.2.3. ex

ODEでは，exは接頭辞ex-が独立した用法（independent usage）としており，OEDでは‘One who formerly occupied the position or office denoted by the context; *spec*. a former husband or wife.’とあり，コンテクストによっては基体として様々な接頭辞ex-の意味を含む基体が想定される。（30）の名詞exはex-husbandのことであり，exがex-husbandの語形短縮の可能性もある。

（30）The children are spending the weekend with my ex and his new wife.
（OALD, *ex*=ex-husband, noun）

しかし，（31）においては，exが文脈によって基体が異なるため，語形短縮よりも転換であると考えられる。

（31）I bumped into my ex in town.
（LDCE, *ex*=ex-wife, ex-husband, ex-girlfriend, ex-boyfriend, etc., n.）

また，（32）の名詞exは元カトリック信者（元シスター）を指す。

（32）The various kinds of Ex’s [*sc*. Ex-Catholics] are allowed to advertise their nasty anti-Catholic talks. （OED, *ex*=ex-Catholic, n.[1]）

3.2.4. pre

OEDではpreは前置詞のみが記載されている。「～以前の」の意味をもつ

接頭辞pre-と同様，preは‘before’の意味のラテン語*prae-*が語源である。

（33）Not an engagement party—a pre-wedding party, and we all know when you have them. Pre a wedding? That’s right.　（OED, *pre*, prep.）

3.2.5. ultra

ODEによると名詞ultraは接頭辞ultra-の独立用法である。OEDでは形容詞としての記載がある。接尾辞-istが付与した派生名詞ultraist（極端論者，過激論者）は名詞ultraとも意味が重複するため，派生名詞ultraistの語形短縮の可能性が考えられる。

しかし，OEDでは名詞ultraの初出例が1817年，派生名詞ultraistの初出例は1842年であるため，名詞ultraの方が古い。このことからultraがultraistの語形短縮ではなく，接頭辞ultra-の転換であるといえる。（34）は名詞ultraの使用例である。

（34）To the last he was considered by the ultras as timid and intellectually weak.　（OED, *ultra*, n.）

3.3. まとめ

短縮語と基体である派生語とが意味的に異なる例や基体である派生語にはない品詞で用いられる例が存在する。接頭辞の転換において，接頭辞が持つ意味を維持したまま転換したといえる。しかし，「第一の，主要な」という意味の形容詞archにおいては，「第一の，主要な」という意味を持つ接頭辞arch-の意味を維持する一方，「おちゃめな，ふざけた」や「抜け目のない」といった意味でも用いられる。

4. 語形短縮と接頭辞の転換による語彙化

接頭辞の語彙化の中には接頭辞付与による派生語の語形短縮と接頭辞の転換の両方の形態をもつ例が存在する。

4.1. 語形短縮及び接辞の転換の例（ギリシャ語系）

名詞及び形容詞のmicroは語形短縮と転換による語彙化と考えられる。OEDでは名詞及び形容詞のmicroは「小，微少，微量」の意味を持つギリシャ語系接頭辞micro-が付与した派生語microcomputer, microprocessor, microwave oven等の短縮語として記載されている。（35）の形容詞microは派生形容詞microeconomics（ミクロ経済学の）の語形短縮である。

（35）These policies amounted to a straightforward Keynesian expansion with some minor addition of a more micro nature.
（OED, *micro*=microeconomics, adj.[3]）

また，形容詞microは，その意味が「極端に小さい」であれば，特定の派生語からの語形短縮ではなく，接頭辞micro-の転換によるものであると考えられる。

（36）Many people think on a micro level. （ODE, *micro*, adj.）

4.2. 語形短縮及び接辞の転換の例（ラテン語系）

4.2.1. mini

OEDによると名詞miniは派生名詞minicar, miniskirt, minidress, minicomputer等の短縮語である。（37）の名詞miniは派生名詞miniskirtの語形短縮の例である。

（37）She looked like a proper harlot, poor little thing, in her fishnets and her leather mini. （OED, *mini*, n.[2]）

また，OEDでは名詞miniは「平均よりもかなり小さく作られた物」という意味で用いられ，形容詞miniは「短い，小型の，小さい」という意味で用いられる。どちらも「非常に小さい，小型の」の意味を持つ接頭辞mini-の転換による語彙化であると考えられる。（38a）が名詞mini，（38b）が形容詞miniの使用例である。

（38） a. The new bite-size Rainbow Chips Deluxe cookie and other minis.
（OED, *mini*, n.[4]）

b. Of course 25,000 cases is pretty mini. （OED, *mini*, adj.）

4.2.2. pro

OEDでは名詞及び形容詞proはprofessionalの語形短縮であり，さらに名詞proはprostitute（娼婦），proline（タンパク質に含まれる非必須アミノ酸，プロリン），pro-proctor（学生監代理）の短縮語として記載されている。（39）のproは形容詞professionalの語形短縮である。

（39） When I turned pro I used to spar with him and he took liberties every time.
（OED, *pro*=professional, adj.[2]）

また，proは副詞及び前置詞としても用いられ，それらは「～賛成の，～支持の」の意味をもつ接頭辞pro-の転換であると考えられる。（40）のproは「～に賛成して」という意味の前置詞である。

（40） They were pro the virtues of individualism. （ODE, *pro*, prep.）

4.2.3. retro

OEDではretroは名詞retro-rocketの短縮語として記載されている。

（41） The retros set off a grass fire which consumed the parachute and wafted smoke into the crew cabin. （OED, *retro*=retro-rocket, n.[1]）

またretroは「復古調の」という意味の形容詞，「レトロ調（のもの）」という意味の名詞としても用いられ，「後方へ，再びもとへ，逆に」等の意味をもつ接頭辞retro-の転換による語彙化であると考えられる。（42）のretroは「復古調の」という意味の形容詞である

（42） The ‘living room’ in the middle was arranged with a collection of retro furniture straight out of [the film] *2001*. （OED, *retro*, adj.）

4.2.4. super

OEDではsuperの基体として，形容詞superfine（最高級の），superficial（表面の；表面的な），supernumerary（定員外の）等を，名詞superfine（特級品），superintendent（管理人），supernumerary（エキストラ），superphosphate（過リン酸塩）等を，動詞superannuate（退職させる），superimpose（添加する）等を記載している。（43）のsuperは名詞superintendentの短縮語である。

（43）My apartment, on the door of which the churlish super had posted a notice that tended to humiliate.　（OED, *super*=superintendent, n.[5]）

また，OEDでは接頭辞super-付与の派生語の語形短縮以外にも「極端な，特大の」の意味の形容詞も記載しており，「上位，過度，超越」等の意味をもつ接頭辞super-の転換であると考えられる。

（44）This sauce is super used to barbecue chicken, pork or ribs.
（OED, *super*, adj.[2]）

4.3. まとめ

接頭辞付与による派生語の語形短縮，接頭辞の転換，両方の形態をもつ例について，ギリシャ語系接頭辞とラテン語系接頭辞に分けてみてきた。

例えば，automaticはギリシャ語系接頭辞auto-を含むギリシャ語*automatos*が語源であり，そこへ同じギリシャ語系接尾辞-icが付与して派生したものである。また，bisexualは基体であるsexualがラテン語*sexualis*で，そこへ同じラテン語系接頭辞bi-が付与して派生したものである。

このように同じ語源の接辞と基体が合わさる現象を西川（2013: 82-85）は同一語源結合の原則と呼んでおり，例として，ギリシャ語系のsymphonyはギリシャ語系-phonyにギリシャ語系接頭辞sym-は付与するが，同義のラテン語系接頭辞com-が付与されないと述べている。

竝木（2009: 21-23）も接辞が同じ語源の基体に付与しやすいと述べる一方，反例としてラテン語系natureに同じラテン語系接尾辞-alが付与したnaturalにアングロ・サクソン語系接頭辞un-が付与しunnaturalに，さらにアングロ・サクソン語系の接尾辞-nessが付与したunnaturalnessをあげている。

本稿で取り上げた語においても同一語源の結合の原則に反する例が存在する。例えば，monohull（単胴船）の接頭辞mono-はギリシャ語源であるが，基体のhullはアングロ・サクソン語源（古英語*hulu*）である。また，ラテン語源接頭辞ex-が付与したex-husbandのhusbandは古ノルド語*húsbóndi*，ex-wifeのwifeはアングロ・サクソン語源（古英語*wīf*）である。

ギリシャ語系形容詞megaにはアングロ・サクソン系接尾辞-lyが付与されず，接尾辞が付与されていない副詞megaが存在する。同じギリシャ語系形容詞archの副詞は接尾辞-lyが付与される。副詞megaのように接頭辞本来の意味を受け継いで語彙化した場合は，他の語源の接辞の付与が阻止され，「おちゃめな，ずるい」等の形容詞archのように接頭辞本来の意味を受け継がず，意味的にも語彙化されており，その結果，アングロ・サクソン系接尾辞-lyや-nessが付与された可能性が想定される。

5. 語から接頭辞への転換と接頭辞の転換による語彙化

アングロ・サクソン語系接頭辞が語としても用いられるものとして，down, fore, out, over, self, step, under, upをあげることができる[7]。いずれも特定の派生語からの語形短縮ではなく[8]，転換によるものであると考えられる。

表1はOEDにおけるアングロ・サクソン語系の接頭辞と語の初出年をまとめたものである。接頭辞down-はdownより初出年が古く，接頭辞over-とover，接頭辞self-とselfは接頭辞と語の初出年が同時期である。接頭辞fore-とfore，接頭辞out-とout，接頭辞step-とstep，接頭辞under-とunder，接頭辞up-とupにおいては，語の方が古いため，それぞれの語が接頭辞からの転換による語彙化とは考えにくい。従って，これらについては，語から接頭辞が派生したパタンであると考えられる。

接頭辞の語彙化の要件として，接頭辞の方が語よりも古くから存在しておく必要がある。語の方が接頭辞よりも古いパタンは，語から接頭辞に転換したものであると考えられる。この現象について，本稿では接頭辞化（prefixalization）と呼ぶことにする。

表1　アングロ・サクソン語系接頭辞と語の初出年

接頭辞	初出年	語	初出年
down-	eOE	adv., n.1	OE
fore-	c1000	adv., prep.	OE
over-	eOE	adv., prep., adj.	eOE
out-	?a1200	v. adv.	OE eOE
self-	eOE	pron., adj., n., adv.	eOE
step-	1549	n.1 v.	c825 897
under-	a1382	adv. Prep.	A900 c825
up-	a1200	adv.1 prep.2	c825 1509

表2はOEDにおけるギリシャ語系の接頭辞と語形短縮及び転換による語の初出年についてまとめたものである。ギリシャ語系では，全ての接頭辞が語よりも初出年が古いため，接頭辞が語彙化したものであると考えられる。ただし，接頭辞pseudo-と名詞pseudoにおいては名詞の方がやや古いが，形容詞pseudoとの比較では，接頭辞pseudo-の方が古い。

表2　ギリシャ語系接頭辞と語の初出年

接頭辞	初出年	語	初出年
aero-	1865	adj.	1982
anti-	1559	n. adj. prep.	1788 1808 1817
arch-	1541	adj. n.2	1574 1605
auto-	c1833	adj.	1903
homo-	1612	adj., n.2	1923
hydro-	1721	n.1 n.2	1882 1916
hyper-	1611	n.1 n.2	1689 1914

mega-	1868	adv. Adj.	1966 1968
mono-	1817	n.4 adj.1	1959 1960
micro-	1849	n.2 adj.	1968 1915
phono-	1834	n.	1925
photo-	1855	n., adj. v.	1860 1865
poly-	1607	n.2	1858
pseudo-	a1425	n. adj.	1402 1854
techno-	1833	n.	1988
tele-	1857	n.2	1934

表3はOEDにおけるラテン語系の接頭辞と語形短縮及び転換による語の初出年についてまとめたものである。ラテン語系においてもcounter, pro, retroの初出年が接頭辞counter-, pro-, retroよりも古く，語の接頭辞化の可能性が考えられる。ただし，proとretroは品詞によっては初出年が接頭辞の方が古い。

表3　ラテン語系接頭辞と語の初出年

接頭辞	初出年	語	初出年
bi-	1572	adj., n.	1957
contra-	1877	n.2 prep.	1981 1362
counter-	1523	v.1 prep.	c1325 c1420
dis-	1566	v. n.	1980 1986
ex-	a1398	n.1 adj.	1827 1823
extra-	1570	adj.	1776
mini-	1936	n.2 adj.	1966 1963
pre-	1559	prep.	1960

pro-	1645	n.1 adj.1 prep.	c1450 1650 1837
retro-	1759	adv. n.1 adj.	1634 1961 1972
semi-	?1550	n.2	1912
sub-	c1386	n.1 v.2	1653 1853
super-	c1429	adj.1 n.2 v.1	1768 1797 1882
ultra-	1551	prep. adj., n.	1793 1817
uni-	1605	n.	1898
vice-	1497	n.7	1597

派生語からの語形短縮であれば，当然ながら付与する接頭辞とその派生語の短縮語とは意味が同一ではなくなる。転換においては，アングロ・サクソン語系を含め，語と接頭辞が持つ意味に隔たりが少ない。しかし，接頭辞からの転換においても，意味が異なる例（arch（ずるい），ultra（最先端を行く人））の存在も確認できるため，その要因の解明について今後の課題としたい。

6. 接辞と連結辞

6.1. 辞書による記載の違い

本稿ではLDCEに基づき，2.節以降はそれぞれの項目について，基本的に接頭辞と連結辞とを分けず，接頭辞として扱ってきた。本稿で扱う項目は，LDCE以外の辞書では項目によっては接頭辞ではなく連結辞と記載している。それぞれの項目をアングロ・サクソン語系，ギリシャ語系，ラテン語系に分け，各辞書がどのように記載しているのかについて調査する。

6.2. アングロ・サクソン語系

アングロ・サクソン語系はunder-のみがすべての辞書において接頭辞として記載されている。表4から，WEBを除いた辞書すべてがout-, over-を接頭辞とし，fore-, under-, up-が半数以上の辞書で接頭辞と記載されている。また，mid-, self-, step-が半数以上の辞書で連結辞として記載されている。辞書によってはdown-, fore-, he-, mid-, she-, step-, up-が記載がなく，he-, mid-, she-においてはOEDでの記載がない。

表4　アングロ・サクソン語系接頭辞（連結辞）

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
down-	pref.	N/A	N/A	pref.	N/A	N/A	CF
fore-	pref.	CF	CF	pref.	N/A	pref.	pref.
he-	N/A	N/A	N/A	pref.	N/A	N/A	CF
mid-	N/A	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
out-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	CF
over-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	CF
self-	pref.	CF	CF	pref.	CF	CF	pref.
she-	N/A	N/A	N/A	pref.	N/A	N/A	CF
step-	CF	CF	CF	pref.	N/A	pref.	CF
under-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
up-	pref.	pref.	pref.	pref.	N/A	CF	CF

（pref.=prefix（接頭辞）, CF=Combining Form（連結辞）, N/A=Not Available（記載なし））

6.3. ギリシャ語系

ギリシャ語系においては，anti-とhyper-のみすべての辞書において接頭辞として記載されている。LDCEはすべての項目を接頭辞に，CCALDにおいてもself-以外の項目を接頭辞としているが，LDCEとCCALDを除く5つの辞書では，aero-, auto-, homo-, hydro-, mega-, micro-, phono-, photo-, poly-, pseudo-, techno-, tele-が連結辞である。表5から，ギリシャ語系リスト16項目のうち，12項目が連結辞と記載されているのが分かる。

表5　ギリシャ語系接頭辞（連結辞）

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
aero-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
anti-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
arch-	pref.	CF	CF	pref.	CF	CF	pref.
auto-	CF	CF	CF	pref.	N/A	CF	CF
homo-	CF	CF	CF	pref.	N/A	CF	CF
hydro-	CF	CF	N/A	pref.	N/A	CF	CF
hyper-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
mega-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
micro-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
mono-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	pref.
phono-	CF	CF	CF	pref.	N/A	CF	CF
photo-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
poly-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
pseudo-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
techno-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
tele-	CF	CF	CF	pref.	N/A	CF	CF

（pref.=prefix（接頭辞）, CF=Combining Form（連結辞）, N/A=Not Available（記載なし））

6.4. ラテン語系

ラテン語系においては，表6から，dis-, ex-, extra-, inter-, pre-, post-, pro-, sub-, ultra- はすべての辞書において接頭辞として記載されており，ラテン語系リスト16項目のうち9項目が接頭辞である。また，半数以上の辞書で連結辞として記載している項目は，bi-, mini-, uni- のみで，多くは接頭辞と記載される傾向にあるのが分かる。

表6　ラテン語系接頭辞（連結辞）

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
bi-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	pref.
contra-	pref.	pref.	CF	pref.	N/A	pref.	pref.
counter-	pref.	pref.	CF	pref.	pref.	CF	CF
dis-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.

ex-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
extra-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
mini-	CF	CF	CF	pref.	pref.	CF	CF
pre-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
pro-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
retro-	pref.	CF	pref.	pref.	pref.	pref.	CF
semi-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	CF	pref.
sub-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
super-	pref.	CF	CF	pref.	pref.	pref.	pref.
ultra-	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.	pref.
uni-	CF	CF	CF	pref.	N/A	CF	pref.
vice-	pref.	CF	CF	pref.	pref.	CF	pref.

（pref.=prefix（接頭辞）, CF=Combining Form（連結辞）, N/A=Not Available（記載なし））

6.5. まとめ

表4から表6までの項目中，ODEが24項目を連結辞として記載しており，LDCEは連結辞として記載している項目は0である。

連結辞の使用法として，ODEは ‘In this dictionary, combining form is used to denote an element that contributes to the particular sense of words（as with bio- and -graphy in biography）, as distinct from a prefix or suffix that adjusts the sense of or determines the function of words（as with un-, -able, and -ation）.’ と述べている。意味という点でも連結辞の方が接辞よりもより具象的であるはずだが，表4から表6までのすべての項目は，接頭辞あるいは連結辞としてだけではなく，語としても存在する。

ODEで接頭辞とする項目，例えば接頭辞anti-, counter-, ultra-が転換したanti, counter, ultraは形容詞等で用いられる。接頭辞が基体の意味を補うだけで，連結辞がそれ以上の役割があるとしても，語彙化すれば必ずしもその差が維持されるとは限らない。

語彙化した項目について，英語学習者向けの辞書であるOALDでは，接頭辞及び連結辞の記載はあるが，ギリシャ語系のaero, homo, phono, pseudo, ラテン語系のcontraについては語としての記載がない。使用頻度も記載の要件になる可能性が考えられるため，これらについてさらに調査していく

必要がある。

7. 結語

接頭辞が語彙化するパタンとして，接頭辞が付与した派生語から語形短縮するパタン，接頭辞そのものが転換するパタン，語形短縮と接辞の転換の両方がみられるパタンの3つのパタンについてみてきた。

接頭辞が付与した派生語から語形短縮するパタンは，ギリシャ語系は16項目のうち10項目で確認でき，ラテン語系では16項目のうち7項目確認できた。アングロ・サクソン語系では該当がなく，接頭辞の転換において，8項目すべてが該当し，ギリシャ語系では5項目，ラテン語系では5項目確認できた。語形短縮と転換の両方の特徴をもつ項目はギリシャ語系1項目，ラテン語系は4項目が確認できた。

アングロ・サクソン語系及びラテン語系においては，初出年が接頭辞より語の方が古い例（fore, out, step, under, up; counter, pro, retro）が存在する。これらは接頭辞の転換ではなく，語の転換による接頭辞化の可能性が考えられる。

辞書によって接頭辞及び連結辞の記載が異なり，語源別に分けて調査した結果，ギリシャ語系の項目において連結辞と記載する辞書が多かった。連結辞そのものが接頭辞以上に意味は具象的である場合，転換による語彙化が多いと想定される。本稿で転換による語彙化とした項目において，7つの辞書のうち，4つ以上で転換とした項目はアングロ・サクソン語系が11項目中3，ラテン語系が4項目中0であったが，ギリシャ語系は5項目中4であった。

今後の課題として，今回の結果を各項目ごとにより精査し，考察していきたい。

注

1. 西川（2013: 16）によると，英語の接頭辞は約155項目，接尾辞（suffix）は約133項目存在すると述べており，現在でも使われている接辞の数として，竝木（1985）は接頭辞70以上，接尾辞約90としている。接頭辞の特徴として，Kodani（2000: 40-42）は，その多くは付与した基体の意味を変化させた

派生語を形成するものの，基体の品詞を変える接頭辞は少数であると述べている。竝木（1985: 115）によると，品詞を変える接頭辞は，a-, be-, de-, dis-, en-, out-, un- の 7 つのみである。一方で，竝木（2009: 20）は，接尾辞は原則的に付与する基体の品詞を変えると述べている。

2. 派生語 mathematics が math，telephone が phone のように語が略されることを Bauer（1983）では ‘clipping’ としている。竝木（2009）では clipping のことを「語形短縮」としている。また，clipping を受けた語のことを竝木（1985），島村（1990）では「短縮語」，大石（1988）では「略語」としている。
3. 語が接辞付付与ではなく綴りがそのままで形容詞から動詞，動詞から名詞などの品詞の変化が生じる現象があり，その過程について，転換（conversion），ゼロ派生（zero-derivation），機能推移（functional shift）等がある。それぞれの分析の違いについては米倉（2015: 54-81）が詳しい。本稿では接辞の語彙化を転換（conversion）とする Huddleston and Pullum（2002: 1640）に従う。
4. 本稿では接辞が語になることを語彙化と呼んでいるが，Bauer（2001: 43-47）では，語彙化は語の本来の意味の変化や発音の変化について表す。例えば，意味の変化として，run time は「競争のスタート時間」の意味からコンピュータの「実行時間；実行時」の意味に，発音の変化として waistcoat の発音は [wéistcòut] が [wésk̇ət] の発音になる。
5. 本稿ではギリシャ語系に関してはギリシャ文字表記ではなく英語アルファベットに変換した ODE の記載に基づいている。
6. 西川（2021: 28）では語形成要素として，自立語，連結辞，接辞に分け，自立語は文中で自立した語として用いられる自由形態素（free form）で，連結辞と接辞は文中で自立した語として用いられない拘束形態素（bound form）と述べている。
7. OED において，he-, mid-, she- の接頭辞あるいは連結辞としての項目が記載されておらず，本節では初出年について触れるため，本節ではこれらの項目は扱わない。
8. 例えば，接頭辞 over- が付与した派生語は，overall, overcome, overheat, overlook 等，様々な品詞で複数存在するが，いずれも over の基体ではないため，over は短縮語とはならない。

参照文献

Bauer, Laurie.（1983）*English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bauer, Laurie.（2001）*Morphological Productivity*. Cambridge: Cambridge University Press.

姫田慎也（2022）.「接辞の語彙化」『日本英語英文学』*32, 25-49*.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
Kodani, Shinichiro（2000）*English Words: Word-Formation and Evaluable Words*. Kyoto: Ryukoku Gakkai.
竝木崇康（1985）『語形成』（新英文法選書 2）東京: 大修館書店.
竝木崇康（2009）『単語の構造の秘密: 日英語の造語法を探る』（言語・文化選書 14）東京: 開拓社.
西川盛雄（2013）『英語接辞の魅力: 語彙力を高める単語のメカニズム』（言語・文化選書 39）東京: 開拓社.
西川盛雄（2021）『接辞から見た英語: 語彙力向上をめざして』（ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ 3）東京: ひつじ書房.
大石強（1988）『形態論』（現代の英語学シリーズ 4）東京: 開拓社.
島村礼子（1990）『英語の語形成とその生産性』東京: リーベル出版.
米倉綽（2015）『歴史的にみた英語の語形成』（言語・文化選書 54）東京: 開拓社.

辞書

Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary（2018）9th ed. Glasgow: HarperCollins Publishers. [CCALD]
Longman Dictionary of Contemporary English（2014）6th ed. Harlow: Pearson Education Limited. [LDCE]
Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English（2020）10th ed. Oxford: Oxford University Press. [OALD]
Oxford Dictionary of English（2010）3rd ed. Oxford: Oxford University Press. [ODE]
Oxford English Dictionary Online.（2000-present）Oxford: Oxford University Press. Retrieved October 30, 2023 from https://www.oed.com/ [OED]
Random House Unabridged Dictionary（1993）2nd ed. New York: Random House. [RHUD]
Webster's New World Dictionary of American English（1991）3rd College ed., rev. & updated. New York: Prentice Hall. [WEB]

（龍谷大学短期大学部）
himeda@mail.ryukoku.ac.jp